

アカイカ 北太平洋

Neon flying squid *Ommastrephes bartramii*



管理・関係機関

北太平洋漁業委員会 (NPFC)

生物学的特性

- 最大体長・体重：外套長約 60 cm・体重約 6 kg
- 寿命：1 歳
- 性成熟年齢：約 10 か月
- 産卵期・産卵場：秋～春、南西諸島～小笠原諸島、ハワイ諸島
- 索餌期・索餌場：春～冬、亜寒帯境界～移行領域
- 食性：魚類（ハダカイワシ類中心）、頭足類、甲殻類
- 捕食者：メカジキ等

利用・用途

てんぷらやフライ等の惣菜、燻製したものやスライスカットした珍味等の加工原料。

なお、2022年6月に本種の流通名を「ムラサキイカ」とすることとなった。これは地域によってケンサキイカやアオリイカ、ソデイカ等も「アカイカ」と呼ばれること、海外産のアメリカオオアカイカ（通称、アメアカ）と混同される場合があること等のためであり、国産アカイカの差別化を目的に変更された。

漁業の特徴

1970年代中頃から我が国のいか釣り漁業が漁獲を開始した。1970年代後半には我が国の流し網漁業も漁獲を開始し、1979年からは東経170度以西を釣り漁場、以東を流し網漁場とする規制が実施された。1980年代にはいか釣り漁業は縮小し、流し網漁業が中心となり、韓国と台湾も参入した。しかし、公海域における流し網漁業が国連決議により1992年末をもって操業停止となったことを受けて、我が国のいか釣り漁業が近海で復活し、その後、東経170度以東にも出漁するようになった。また、この頃、中国のいか釣り漁船も多く操業するようになった。2000年頃から再び我が国のアカイカを対象としたいか釣り漁業は縮小し、数百隻と言われる中国漁船を中心に台湾及び韓国いか釣り漁船が東経170度の沖合から日本近海にかけて操業してきた。近年は冬春生まれ群の資源の減少に伴い、中国漁船も秋生まれ群を対象とする操業（東経170度以東の北太平洋中央部）にシフトしてきている。我が国のいか釣りの漁期は、日本近海における冬春生まれ群（西部系群）を対象とする冬漁（主漁期1～3月）と、北太平洋中央部における大型の秋生まれ群を対象とした夏漁（5～10月）に分けられる。

漁獲の動向

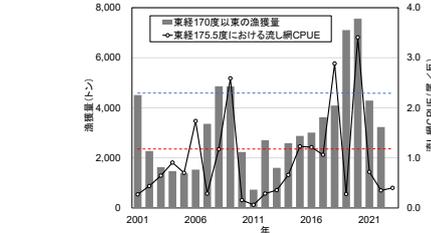
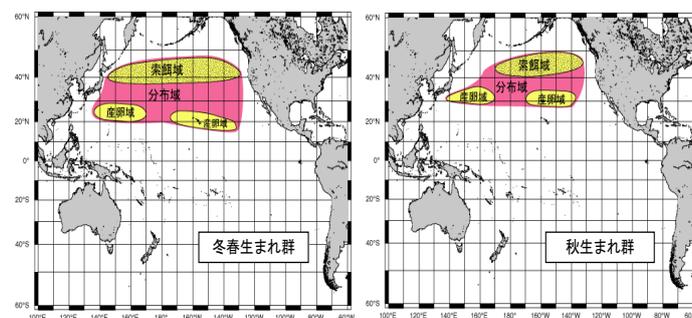
1970～1990年代初めには主に流し網により漁獲され、毎年の漁獲量は、漁業国の総計では20万～35万トン、我が国では5万～22万トンであった。公海流し網操業停止後の1994年以降ではいか釣りにより漁獲されている。流し網操業停止後の我が国のいか釣り漁獲量は1995年から1999年にかけて2万～4万トン前後であったが、近年は、夏漁と冬漁を合わせて1.0万トンに満たない水準である。これは漁船の隻数の減少の影響が大きい。冬漁は、近年は不漁が続いており、2015年、2016年と2年連続でほとんど水揚げがない状態であった。2017年、2018年は2年連続で500トン以上の水揚げがあったものの、2019年以降は低調な水揚げとなっている。一方、夏漁は、2019年に漁期を拡大したことで2019年、2020年は7,000トン以上と漁獲量が増加傾向にあったが、2021年と2022年は操業日数の減少に伴い漁獲量が減少した。中国の漁獲量は、1990年代後半に増加して1999年にピーク（約13万トン）を記録し、2000年代まで8万～13万トン程度で推移した。2010年代は減少傾向にあり、2017年は3.9万トン、2018年は2.0万トン、2019年は1.6万トンと毎年過去最低を記録しており、2021年は1.0万トンを下回り、2022年は過去最低の0.7トンであった。

資源状態	
<p>秋生まれ群を対象とした調査では、2001～2023 年の北太平洋中央部海域（東経 175.5 度ラインを主とする）での流し網調査 CPUE の平均は 0.95 尾／反であり、2023 年は 0.40 尾／反と 1999 年以降で最も高値となった 2020 年の 3.41 尾／反を大きく下回り、平均以下となった。2023 年の流し網調査 CPUE を 2001～2023 年における最低値（0.06 尾／反；2011 年）と最高値（3.41 尾／反；2020 年）の差を 3 等分し、この間の資源水準を低位、中位、高位に区分した基準で判断すると資源水準は低位に相当し、資源動向は減少と判断される。冬春生まれ群を対象とした調査では、2006～2023 年の北太平洋西部海域（東経 144・155 度）での流し網調査 CPUE の平均は 4.28 尾／反であり、2023 年は 2.84 尾／反と平均値を大きく下回っており、2013 年以降平均値以下の年が続いている。流し網調査 CPUE の最低値（1.22 尾／反；2020 年）と最高値（15.99 尾／反；2007 年）の差を 3 等分し、低位、中位、高位に区分した基準で判断すると、2013 年以降の資源水準は低位で資源動向は横ばいと判断される状態が続いている。</p>	

管理方策	
<p>北太平洋におけるアカイカの資源単位として 4 系群が提案されている。しかし、資源管理上は極めて複雑であることから、NPFC の科学委員会においては東経 170 度を境にして東西で統計データの集計が進められている。</p>	

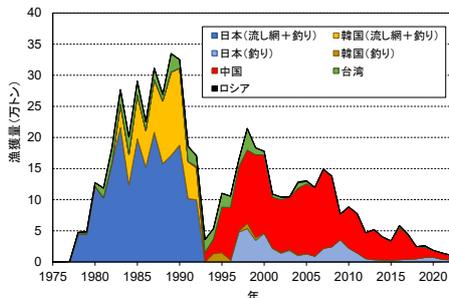
アカイカ（北太平洋）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	1.1 万～2.6 万トン 最近 (2022) 年：1.1 万トン 平均：1.9 万トン (2018～2022 年) *1
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	0.3 万～0.8 万トン 最近 (2022) 年：0.3 万トン 平均：0.5 万トン (2018～2022 年) *2
資源評価の方法	流し網調査 CPUE により水準と動向を評価
資源の状態 (資源評価結果)	・秋生まれ群：流し網調査の CPUE をもとにすると資源水準は低位。資源動向は減少傾向。 ・冬春生まれ群：流し網調査の CPUE をもとにすると資源水準は低位。資源動向は横ばい。
管理目標	未設定
管理措置	公海大規模流し網禁止（国連決議）
管理機関・関係機関	NPFC
最新の資源評価年	2023 年
次回の資源評価年	未定

1 NPFC 資料 *2 漁獲成績報告資料

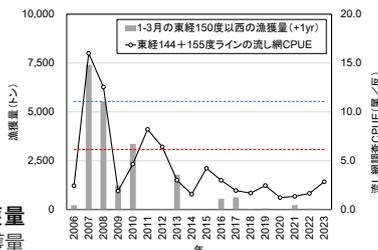


夏季流し網調査におけるアカイカ流し網調査 CPUE と東経 170 度以東のアカイカ秋生まれ群の我が国の漁獲量の推移 (2001～2023 年、漁獲量は 2022 年まで)
破線は 2001～2023 年の調査流し網の CPUE の最低値と最高値の差を 3 等分した水準を示している。赤色破線以下は低位、青色破線以上は高位、赤色破線と青色破線の間を中位と判断。

アカイカ冬春生まれ群と秋生まれ群の分布域(漁場は索餌域に形成される)



北西太平洋海域のアカイカまたはイカ類* の漁獲量 (1975～2022 年) 各国・地域の 1975～1994 年の漁獲量は FAO 統計、1995 年以降は各国・地域ともに NPFC 報告資料を基に作成。*FAO 統計資料は北西太平洋海域の Various squids 及び Common squid の漁獲量を一部含む。



夏季流し網調査におけるアカイカ流し網調査 CPUE と東経 150 度以西海域の 1～3 月のアカイカ冬春生まれ群の我が国の漁獲量の推移 (2006～2023 年、漁獲量は 2022 年まで)
破線は 2006～2023 年の調査流し網の CPUE の最低値と最高値の差を 3 等分した水準を示している。赤色破線以下は低位、青色破線以上は高位、赤色破線と青色破線の間を中位と判断。なお、流し網調査は 6～8 月、我が国の漁獲は 1～3 月と年が異なっているため、流し網調査の年に棒グラフを合わせている (+1yr)。